

あてんしょん!



太宰が超能力()でスプーンを曲げる 太宰→→→→→→→→→ (?←) 中也

上記が地雷の人は読むのをやめよう!

なぜか流れでセックスするから 18 歳未満も 読んだらだめです!

超適当に考えた文章を書き連ねる。 感覚で片手間にできるもんなのか?」 の業務は国木田…ではなく中島敦社員に一任致します。うん、敦君、君に決めた。 つま先でうりうりと突ついてくる。 「ええと期間 「なぁ、さっきから何書いてるんだよ」 ー は ? 「休職届。ちょっと、邪魔しないでよ字が曲がる」 上体を横にひねった体勢でそれを書いている私の太腿を、中也が布団の中から伸ばした これこれこのような事態につき、休職いたしたくお願い申し上げます。なお休職期間 病室のベッドの端に腰掛けて、サイドテーブルの上に広げたまっさらな紙に、今さっき 休職? は…とりあえず八月いっぱいでいっか……あのね、 おいおい、さっきの話は何だったんだよ。俺たちの崇高 いったい誰のせいでこう な活動はバイト

見舞いに来たら私の犬は元気ピンピンだった。

なったと思ってるの、中也」

いただけの病院着を脱ぎ捨てた。 からぺたっとした革のスリッポンを取り出し、裸足のままで足を通すと、 に、ここを出るよ」 ていたのだよ。その間の恩もある。非礼はできない」 「私は君が作戦中に頭を打って昏睡していた間、日銭を稼ぐために民間の探偵社で雇わ 「分かったら君もさっさと支度して。君を騙そうとしたポートマフィアの奴がまた来 「うるせぇな。 「お、おう……そっか、わるかった」 変な靴 服も買い わかった、と素直に頷いて、箸でプリンをかき込むと、中也は布団を剥いでベッドの下 直 したい 俺だって気に入ってるわけじゃね ·から金貸してくれ、と私に頼む中也の顔を見下ろして、頭の中に一割 えよ。 来た奴が置いてったん 私服に羽織って れ

ほど残していた全部彼の演技であるという可能性も消した。

マジのマジで記憶喪失なんだ、このポートマフィア幹部様は。

情けない表情をしたので、箸で食べたらと言ってベッドから立ち上がった。

指先でぐにゃりと曲げて、サイドテーブルの上に放り投げた。「俺のプリン…」と中也が

昼食で出されたプリンを食べていた中也の口から小さなスプーンをすぽんと引っこ抜き、

ポートマフィア首領執務室 二十時間 前

「はあ。 記憶喪失」

「うん。何だい太宰君、

「厭そうじゃなくて、厭です。あのね森さん、私が今まで、森さんからある日突然連絡を

そんな厭そうな顔して」

貰って中也が記憶喪失になったって聞かされる太中小説を何万冊読んで来たと思ってるん

ですか、最早記憶喪失は鉄板ネタ! 驚きなんてありませんよ」

「うん…なんて?

太宰君が急に早口になって怖 ٦ د ۱ 3

も一切なしに? シンプルな記憶喪失? 「しかも女体化したとか幼児化したとか弱体化したとか花を吐くとかそういうオプシ あまり武装探偵社を舐めないでください」

「探偵社関係ある? **聞きましょう。その内容によっては、私個人への依頼というのを受けますよ」** …まぁ、オプションと言われれば、 無いこともないけど」

服 ね、 分かったよ。アジトに向かう途中で買って行こう。その分ちゃんと働いてよ?」

「アジトか……アジトがあるんだな」

その単語を、中也は嬉しそうに歪む口元を噛み殺しながら反芻した。

何 .が嬉しいんだか。今から向かうのは、つい一時間前に合鍵を作ってきた、 中也が所有

しているセーフハウスの一つで、つまり自分の部屋に帰るだけのことだというのに。

「安心しろ。手前に面倒かけちまった分も合わせて体で払うからよ」

「あっそう。張り切って空回りしないでよ」

もう私たち二人しか残っていないのだから ا د 私は今年一番の悲しい表情を作った。

こうかはてきめんだ! あと一押ししておくか。

-中也……ポートマフィアの力は強大だ。 だが手足となっている関係組織から捥 その組織の連中が、 ĺλ でしま

私たち『サイキック・ナンバー・ナイン』の仲間を……うぅっ……」 えば、私たち二人だけでもその頭を叩くことができるだろう。それに、

頭をぽんぽんと一、二度叩いた。 (は???? 何、今の????) 堪え切れないという風に口元を手で押さえてその場にうずくまると、中也は黙って私の

▼彼氏でもないのに頭をポンポンする男性の心理は? みなさんこんにちは!太宰ムゥ子です!

彼氏でもないのに頭ポンポンしてくる男ってマジで何?そんな男性の みなさんは突然男性から壁ドンや頭ポンポンされた経験ありますか? 心理を調べてみました!

② 恋愛感情を持っている

3

スキンシップ欲求

④ 自分のことをかっこいいと思っている

いかがでしたか?よかったらチャンネル登録おねがいします☆

「あ……うん、大丈夫……」 |太宰? 立てるか?|

びびった~。あまりの嫌悪感に鳥肌が立つとか通り越して、

脳内で動画投稿してた。

「俺は…正直、今は、他の仲間の顔も思い出せねぇけど」 そりゃそうだろう。『他の仲間』なんて私の作り話で、初めからいないのだから。 中也から差し出された手を遠慮して立ち上がる。

室に現れたマフィアの連中だって言うなら納得だ」 に俺は、手前と一緒に何かと戦っていたことがあった気がする。その相手が、先に俺の病 「けど、手前が俺の前に現れて、俺の名前を呼んだ瞬間、他人じゃねぇと分かった。 確

暴力の雨を降らせていたのかもしれない。そうは思わないのかい」 「正直分からねぇ。だが俺は、この『超能力』を誰か ――いや、何かを、守るために使っ

私の言っていることが嘘で、君は本当にマフィアの一員としてこの横浜の街に

「なぜ?

マフィアが手前の言うようにこの街を破壊

する存在なら、 ていたはずだ。そんな気がするんだ。そして、 「……そう」 私は、数時間前に森鴎外から言われた言葉を思い出していた。 俺がそこにいたとは思えない」

今の中也君は、ポートマフィアを敵と認識している。 憶が 混濁 しているようだ。 加えて、迎えに行かせた者の人選も悪かった。 我々が同胞

であると彼に信じさせる言動ができなかったらしい。

判断 が激しくなれば、 は野性的なセ 中也君は異能力のリミッターを外す。 ンスによるものが大きいからね。もし、 君も知っての通り、 市街地で『汚濁』 戦闘 を使ったら、 時 の彼の

らポートマフィアの主戦力である重力遣いを楽に始末できると考えているのだろう。

戦 闘 な

病院で騒ぎを起こしたことで、もう既にいくつかの敵対組織が行動を始めている。

きていなかったがゆえに、私の部下は生きて報告に戻って来ることができた。

感情が昂り、重力操作の異能も発動させたそうだ。しかし本人も驚いた様子で、

制御

に何やら書きかけ、すぐにペンを止めてびりりと二つに破った。 君 ·に依頼したいことは以上だ。と言って、森は自らの机から『銀の託宣』 を取り、

あとは説明不要だろう。

私が受け取るべくもないと分かったのだろう。

中也 病院のエントランスを出て、 君は 記憶 がなくても、 タクシーを待っていた中也の表情がすこし曇った。 以前と同 ...じように超能力は使える

そこから垂 痛 地 中也は数メートル先の赤い消火栓を指差し、私に見ろと促した。 面か いとこ突くな。…ま、戦力を確認したいのは当然か」 ら垂 |れ下がった太い金属の鎖が、ガチャガチャと離れた所まで聞こえる音を立てて 直に突き出た消火栓の両側から耳のように出っ張ってい るホース接続

「ありがとう、 |嫌味だな よく分かったよ」

振動し始めた。

しかし次の瞬間、

消火栓ではなくその根元のアスファルトに亀裂が走る。

横目に見ながら、運転手に行先を告げた。 「そういうのを嫌味って言うんじゃねぇか?」 やって来たタクシーに先に乗り込み、隣に座った彼がばつの悪そうな顔をしているのを 味で はな いよ。君が本調子ではないということがよく分かったって話

いつもの中也なら、全方位からバラバラに射撃されても、その弾丸の一つ一つにか かる

重力をかけるか、そのコントロールがうまくできないようだ。 に天井を歩くこともできた。今の彼は力を対象 重力のベクトルを操作して、 異能力は、 異能の性質と異能力者の自我がシンクロするほどその真価を発揮する。 数倍の威力で一斉に跳ね返すことができたし、足音を立てず に作用させることはできても、 どの程度の

その力は超能力で、自分たちは超能力者で、私と君は超能力集団の仲間なのだ! 今の中也は、『異能』の気配を『超能力』と誤認識しているから、自分の手足のように に操ることができなくなっているのだろう。

て与太話を彼に吹き込んだのは私なので、言ってしまえばこの弱体化は私のせい……いや、

信じない

でしょ普通。

な話を信じる中也が愚かなのがいけない。

それならそれなりのやり方を考えるだけだよ。必要なのは君が今どういう状態かっていう 「君は覚えてないだろうけど、 作戦中に君が本調子じゃないときなんて何度もあったし、

迷惑な 情報だ。

――……なに笑ってるのさ」

中也ってすぐ怪我とか体調不良とかを隠すから、

それが正直こっちにしたら一番

昨日今日の 意図して話したことではなかったが、どうやら信用を得られ 出来 事のように話したが、 実際にそういう迷惑を被 たらし つて ſ, た 0) は 四

「いや。手前について来たのは間違いじゃなかったらしいな、と思って」

の話。中也から私への距離感が、 当時の彼と私の間にあったものと似ているせいで、

私まで調子が狂わされてしまう。

あの、

お

りてください。

おり

大黒ふ頭で車が停止し、 お客さ 運転手の男が声を震わせながら私たちに降車を促した。 Ź

全然違うし」 「……あぁん?」 あぁ、 あ? 運転席からの操作で開いたドアから降りると、タクシーは一目散に走り去った。 中也が後部座席の窓から外を見て、倉庫街か、あんま趣味じゃねぇなぁとぼやいた。 どうもありがとう。でも代金は払わなくてもいいよね? 着いたのか?」 私がお願いした場所と

私と中也を取り囲んだ。中也は舌打ちし、気づいてたなら早く言えよと文句を吐いた。 「送りっ放しの一方通行だろ。ったく、策も無しに暴虎馮河か」「どうせ潰す予定だった組織だし。拠点まで送迎してくれるなんてお得じゃないか」 周 囲 |の倉庫 のシャッターが次々に開き、 銃やナイフで武装した人間がぞろぞろと現れ、

が生き残ったって誰 「ああそうかい。精々その粗末な策で、俺を死なすなよ。スプーン曲げられるだけの手前 策ならあるさ。 あのタクシーに乗る前からここまで、 の仇も取れやしねぇからな 予定通りだ」

「自慢の能力なのにな~。 中也は 元 を付けて訂正することはせず、満更でもなさそうに笑い、私の合図通りに ま ご期待には応えるよ。 なにせ私は 君の相棒、 だから ね

走り出した。

これはどういうことだよ、とラフなTシャツとスウェットに着替えた中也が、 さすがに

動揺した顔で私を見上げて尋ねた。

「え? どういうって…必要でしょ?」

「何が」

ただでさえ数日間病院で寝てるだけの生活で体がなまってたんだ、疲れたでしょ?」 「このアジトに帰ってくる前に組織一つ殲滅してきたんだよ。それも中也と私二人だけで。

「それはそれは健勝……」

「いや全然。余裕すぎて物足りねぇくらいだった。だから、按摩なら要らねぇ」

あそうか記憶を失っているのだった。この違和感、ちょいちょい私を萎えさせるな。 「これも覚えてないんだろうけど、超能力者は、超能力者のパートナーと組んで行動する 按摩? 私が中也をマッサージしてあげるわけないじゃん、何言ってんだろこいつ…あ

ことが多いんだよね。私たちみたいに。何故だか分かる?」

これでは本当に、十代の頃の自分たちみたい てから 中 いる 也は が の 何度か鼻に付いていたあの気障な態度も見せな ľλ 私に押し倒された体勢のまま、眉を寄せて難しそうに小首を傾げた。 5 が大嫌いな太宰治だと認識していないと、こんな風に無防備に振る舞うの いらした。ポートマフィア五大幹部という肩書きも忘れているため だ。 Ĺλ 体力のように 自分 0) 目 か ځ

周 囲 に赤色の異能発光を一瞬纏う。 それは 瞬時に砕 けて消えてしまっ た。

Ŋ 返すのに使ったって言ってたし、

今の君の超能力は言ってみればガス欠なわけ」

マ ・ジか よ……他 の六人の仲間 を殺した組織も明 日からぶ っ潰し に行こうと思 ってた

その度に

何

日

[も寝]

込まなきゃならねぇ

0)

か?

体はどこも疲れ

て ね

え のに

に消費する

「だから、

タイプの超能力者は、逆に使用頻度が低くて地味な超能力の持ち主をパートナーに選ぶ。

そういうときのためのパートナーなんだってば。日常的に力を大量

ね 超能力、 使えないでしょ。病院でもマフィアを追

が、

重ねていた私の手の平を押し返しながら、中也が重力操作の異能を発動させようと体の

「そうなのか。でも、 さっきの奴等をぶちのめした後も、 俺の超能力は

休養 超能力は、無尽蔵に湧いてくるわけじゃない。使えば減るんだ。そして、 で回復するのを待つ場合、何日も か か ってしまう」

少し胸 前 に

再会

足りんのか? 手前のそのショボい能力で?」 くなったときは、 自分がガス欠になってしまったときの『補給係』にするからだ」 能力の内容と、 成程。俺と手前が相棒なのは納得だな。 本人が体内に蓄えておける容量は比例しないよ。 手前がスプーン曲げの超能力を俺に供給してくれるってわけだ。…って、 つまり、俺が重力操作の超能力を使えな むしろ、 能力が地 味

込んだ方がいいしな。分かった。さっさとやってくれ」 「まぁそういうことなら…。残りの組織にも、 話が伝わって警戒される前にさっさと乗 寝て待つよりずっと早く回復できるはずだ」

あればあるほど、

容量は大きい傾向にある。それに、

供給を数回に分けて行えば、

黙って

そんなところ汚い、え、 「何だよ、痛かったりするのか? 別にそれくらいなら………おい、なんだそれ、やめ、 ちょ、待っ、はぁ? タンマお ; (1) 待てって、うそだろ嫌だ、

「はーい。ちなみに、これは君のためにすることなのだから、

暴れたりしないでね」

中也は十五歳で初めてしたときとそっくりに大騒ぎしながらくるくる表情を変え、 だだっ広 べい ットの上でどたばたと、大の大人同士のそれとは思えないような、 やか

無理だっつって!あ、

あーーっ!!」

ましいセックスをした。

それから数日後のこと。

がなだけの弱音がこぼれ出たので、後ろから掴んでいた彼の尻を放してやると、 もうほんとにむり。と、枕に顔を押し付けてずっと何やら呻いていた中也の口からひら 不細工な

「三日と空けずに戦闘だったもんね。さすがに疲れが出てきたかな」

紙飛行機みたいにシーツの上でぺしゃんと潰れた。

いや…戦闘は、 なんてこと、ねぇんだわ…それより、 その後の、これが」

「これ?」

顔だけを私に向けた。理性を手放すすれすれの、溶けたドロップのような瞳に私が映る。 汗に濡れた背中がつらそうに上下している。撫でると、うざったそうに髪をかき上げ、

をあやしながら言うと、ひぃ、と雛のように鳴いた。 いない性器を握る。 「これって何 シーツと彼の体の隙間に手を差し込み、 ? コレのこと?」 なんだ、まだできるじゃない。回復をサボっちゃだめだよ、 持ち主のテンションに反してまだ硬さを失って と先っぽ

に乗せると、「も、う、い、や、だ!」と両手で私の胸を押し返した。 「え~~~いやだって言ったってさぁ、こうしなくちゃ君の超能力がまた使えるようにな 「うっ、あ、うう…なにが回復、だよ…」 これで疲れてんだよ、これで! と身を捩って悪態をついた彼の腕を引っ張り、膝

らないんだから、仕方ないでしょ?」

度に三回も四回も尻に突っ込まれる身にもなってみろ! すげぇ疲れるんだぞ!」 「私の超能力はほら、空っぽになっても誰も困らないから、補給は専らする側で、 された

「他に方法はねぇのかよ!」てか、するにしても一回でいいだろ?」チンピラ潰して帰る

経験って無いのだよねぇ~。これをエスパー界隈では『タチ専』といいます」 「嘘つけぇ! 大体、補給って手前の、た…体液を、俺に注げばいいって話だったろ。そ

れなら別にここまでする必要ないだろうが! もっと楽な方法が」

「楽な方法…? え…ある? セックス以外に?」

「え、分かんない分かんない。中也は知ってるの? あるだろ」 教えてよ」

だから……キ……」

外出先でパートナ 一界隈 キ…キスとか。 では キス? 『十秒チャー ĺ 最中もしてるだろ。 ん~~~~~どうかなぁ。キス一回の補給量なんて微々たるものだよ? が超能 ジーとい 力切れを起こしたときの応急処置的な位置付けで…これをエス います」 あれだけでいいじゃねぇか、 補給手段は

襲ってくる連中と鉢合わせて、 「あ、もうそんなにいった? 私たち超能力者集団『サイキック・ その繰り返しでもう五つはそれ つぽ () ナンバ 組織 ! を壊滅させた」 ナイン』の

手前ときたら一度始めると明け方までやめねぇし、それで翌日外に出ると、

俺らを狙って

がか

か

だったら何回もすればいいだろ。とにかく、手前の『補給』は俺の体に負担

とは比べ物にならねぇくらいデカい。 仲間七人全員の仇を討つまで、あと一歩だね」 名前も顔も思い あ 次は いよいよ大本命のポート 出せない『仲間』のために、よくここまでシリアスになれるものだなぁ 万全にし マフィア ておきたい に仕掛ける。 んだよ 規模は今までやりあ っ た連

表情だけ は同 調した感じを装 61 頷 Ü た。

あるんだよ。そのこと、忘れないでよね」 と感心しなが 確かに、 な地味な能力の私だからこそ、 戦場では私 の能 力は 何の役にも立たな 中也の規格外の能力を補給しても余るくらいの貯蔵が (J から ね。 で ₹ ね さっき言 0 た通 ŋ

「……あっそ。都合のいいパートナーに恵まれて幸運だな俺は」 「そういうこと。ほら、キスだけで済ませたいんでしょ? 好きにしなよ」 膝に座らせた中也の顔を見上げながら、自分の唇をとんと指でたたくと、 超能力者って

不便だな…とぼやきながら、野良犬みたいに行儀悪く噛み付いてきた。

「っは、あ、……ふ」

私の作り話を真に受けて、キスだけで体液を奪おうと懸命に吸い付いてくる彼の舌が、

私の舌から横やりを入れられる度にじたばたして面白い。

と肩を落とした。うんうん、そうだろうそうだろう。私が触っているのだから。 と喉を震わせた。一瞬、異能発動の気配を纏ったが、 「ふふ…どう? 超能力戻った?」 息つぎで離れた唇の端から透明な雫が伝ったのを、 その後すぐに「まだ駄目みてぇだ…」 頬に手を添えて舐め取れば、 ひくり

「何回もするんだっけ? 私はこのまま朝まで続けてもいいけど……中也はどう?」 「嫌だ……寝ないと、明日…ポートマフィア……」

「そうだよね、明日は楽しいポートマフィア最終決戦だもんね」

「うんうん、一緒に行こうね。そのためには今サクッと回復しておかないと」 「そう…マフィアに…明日の朝……俺……」

ように溜息を吐いて、ゆっくりそれを浮かせた。 酸欠でへろへろになってしまった中也の細い腰を促すように擦ると、 ハァ、 と観念した

-----太宰 何 ? _ 明日になる前に、 手前に聞いておきたいことがある。 と中也は言った。

手前にとって、俺をパートナーに選ぶ理由は何だ?」 と気遣って俺も聞かねぇでいたが…その仇の組織をいくつぶっ潰しても、 仲間の仇討ちをするとか言う割には、そいつらの話を全然しない。思い出すの 「病院を出てから今日まで、昼も夜も手前と行動を共にしてきたが、手前は死んだ七人の 「強すぎる力を持つ俺には、手前のようなパートナーが必要。それは分かった。 まるで興奮する が辛

素振りも見せねぇ。何も覚えてない俺と、 「……君が最強のカードだったからね。ご覧の通りかよわい私にとっては、 テンションが変わらない」 強い超能

「へぇ。じゃあ何か、手前は自分のボディーガード欲しさに、俺にこだわるのか?」

を傍に置いておくことは身を守る術だ」

「そんなところだよ。がっかりした?」

かふかと柔らかくて、脈打ちながら熱で包み込む。 何度も私の精液を飲まされて、その行為に適した形に作り変えられた中也のそこは、 満足だ、と言って、中也はおしゃべりで少し萎えた私のペニスの上に腰を落とした。

Š

いいやし

「ん……ん、っ、あ~~………ッ、ん、あっ」

だらしない声を洩らしながら少し沈めては、ゆるゆると持ち上げ、

下手なフェラチオみ

たいに先っぽばかり刺激されるのが、入れてる方にはもどかしい。 焦らしているつもりなのかと顔を見ると、余裕がなさそうに眉根を寄せて、髪の生え際

することがあっても、快感が強くてすぐギブアップしてしまう。昔からそうだ。 から顎へと汗の玉がつたっていた。 「手伝おうか?」 「っるせ……ガソリン屋は黙って勃たせてろ」 也はとにかく感じやすくて、時々機嫌のいいときなんかにこうやって自分で動こうと

結局私にされるがままになってイカされて、よく重力マグロって呼んでからかったな。

それが……なんとびっくり、この私の読みが大外れ、何もなかった。 四年ご無沙汰だったけど、再会したらまたこういう関係も復活すると根拠なく思っていた。

に、森さんの見え見えの計略に乗るはめになった。 ただけで終わる。三巻で再会してから今や二十一巻だぞ。中也ともう一度ヤリたいばかり 「んなこといったって…手前が中ででかくすっから…」 「ねぇ…そんなノロマじゃ、私イケな ٦ ۲٦

こっちから折れて連絡してやっても着拒、偶然外で遭遇してもしょうもない口喧嘩をし

と自覚する。ほんと腹が立つ。こんな気持ちいい体にしてやったのは私なのに。 それに合わせて内壁がきゅんと収縮して、自分が中也のナカを犯していることをはっきり 目の前にあるぷっくり膨らんだ乳頭を摘まんで捏ねたら、びくびくと全身を震わせた。

ずぷ、と奥まで私の侵入を許していく。 手で撫でてあげると、あ、あ、あ、と高い声をあげて、それに伴って弛緩した体がずぷ、 「だーめ。や、いいけど、私はまだだから、また中也たいへんだよ」 「あっ……あ、……ッ、は、あ、っ、い、 「あ、……ぁ、んう、吸うな、……っ」 目の前にあるんだもん」 わざと音をたてて乳首を吸ったら、ぐんと背中をしならせた。差し出された両胸を舌と ト く く

ちゅうっと唇を吸うと、とろんとした目で私にすがった。

る最中も私の手の中で扱かれて、鈴口からぴゅくぴゅくと名残を垂らしている。 舌をすり合わせてきてくれるのが、馬鹿で可愛い。 「っは、はあ、ふぅっ…」 「舌だして中也。もっとキスしよう」 私のを銜え込んだままの腰をがくがくと痙攣させて、中也は精液を吐き出した。イッて って上下に扱いてやると、や、だめ、と慌てて私の胸を叩いた。それでもキスをすると 手の平にローションを垂らして、お腹につきそうなくらいに反り上がった中也の性器を

奥までぜんぶ収まった欲望で、その更に奥へ入れてもらおうと小刻みに揺らす。 この体勢で彼を抱くときの、突き上げる度にぱさぱさと揺れる髪の毛が 思いながら、まずは中に注いであげるべく、下からずんと突き上げる。 る度に、舌を絡めてこくこくと唾液を飲んだ。後で口にも出させてもらおう、

キスで補給すると言った手前か、中也は苦しそうに息を乱しながらも、私に口付けられ

とこっそり

「ひぃっ! あ……っ、あ!」

「あ、これっ、おぐっ…♡」

「ねー…いれて? ここ。いいでしょう…?」

「だめ、やっ…あ、

なったか 応じる。 同じなのか、あっ、あっ、とひっきりなしに甘い声で喘いだ。 らそこを捏ね回しているだけでいつでも射精できそうなほどに気持ちよく、 でじっとり濡 「ん~~……いいリクエスト。超能力者って悪くないね」 「はっ…やぐぅ、 ち 中の締 細い腰を掴んで、ゆっくりとシーツの上に彼の背中を降ろす。 抱き締めたまま前後に揺さぶると、ぐぽっ、と彼の体内から卑猥な音が聴こえた。 中也は人差し指を噛みながらぶんぶんと髪を振り乱す。それを下から観賞しながら、 ぎゅうと絞 のように快感が膨れ上がってゆく。 \Box め付けがきつすぎてうまく動けない。 か、 の中の粘膜の刺激と、 って引き留めてくるその肉から、 れた背中を抱き締めて奥を抉じ開けた。汚い悲鳴にイキそうになる。 ふるりと唇を震わせた。覆い被さって吸い付くと、 なか、だして……っ」 下の粘膜から与えられる刺激が直結して、 それでも、 強引にペニスを引き抜 亀頭から雁首までを絞られなが シーツの冷たい感触が気 一待ちわびていたように いて、 全身が性器に 中也もそれは また奥まで一 汗

気に突き入れた。

仰け反って浮き上がった腰を掴

んだまま、

がつがつと叩きつける。

ッ、う、ううっ、あ、

ぼろっと中也の青い目から水が溢れて、シーツを濡らした。ぞくぞくと背が泡立つ。

やめっ、むり、ぃ~~っ♡あっ、」

「い、いらな、一回でいい、いいからぁ……っ」 - 迷惑かけた分、体で払ってくれるんでしょう? 嫌がる中也の腰を逃がさないように押さえて、せり上がってきた精子を一番奥ではじけ まずは一回ね。中也…出すよ」

もっと泣いてるとこ見せて……いっぱいヨくしてあげるから」

思考がシンプルになってゆく。ベッドが勝手にぎしぎしと軋んでいる。 私の体は意思を

うにナカがきつく締まって、私が擦り付けるザーメンをごくごく飲んでゆく。

「あ……あ…、いい…きもちい……」

させた。この瞬間、商売女みたいに派手に見悶えてくれるところがたまらない。味わうよ

離れて本能で中也を貪り始めた。 中也もまた、私と同じ生き物に変わり、 両脚を私の腰に

絡めて自ら腰を振り始めた。 いかなと思いながら、 柔らかく笑う彼の目は焦点が合っていなくて、どうかこのままもっと馬鹿になってくれ 知り尽くした気持ちいい場所を何度も責めた。

だざい、だざい、と彼のハスキーな声で名を呼ばれながら彼の狭い胎内に精液を注ぐ、

これ以上に、私を愚かにしてくれる行為なんてない。もうずっと昔から。

大通りで中也が拾ったタクシーは、 もう少し寝たいと言う中也の隣で二度寝して、 今度は指示通りに森コーポレーションのビルまで私 行動を起こしたのは夕刻だった。

たちを運び、 普通に代金を受け取って走り去った。

この日になっちゃったね」

超能力者、

か。

さすがの強い超能力者様も、 目 .の前に高くそびえるポートマフィアの本拠地。 戦力差を感じて緊張してきたのかもしれない。 中也は黙ってその建物を見上げて

かっていた邦楽のタイトルを拝借して、私が適当に考えた作り話の役目も、 あの日、 この場所から中也が入院している病院へ向かうのに使ったタクシーの車中でか そろそろ終わ

生還した中也と、 横浜 の街を守る九人の超能力者集団と、 その相棒の私。 彼らの行く手を阻む悪の組織、 仲間の死、

を襲ってきてくれたので、 あまりにもチープだが、 中也は疑う様子もなかった。こんなに連日、 即興にしては良い出来だったし、実際に武装した連中が私たち 間を開けずに襲撃

来てしまうゲームなら、あんな大げさな休暇届なんて書く必要もなかったな。 ルに見舞 できれば、 われ あと数か月はこの設定で遊んでいたかった。こんなほんの数日で魔王城まで ている間にその首を取ろうと焦るのも、 仕方ないことでは ある。

てくるとは予想外だったが、『重力遣いの異能力者』中原中也が記憶喪失というトラブ

達成することができる。そういう意図だろう。 組織とあの人への忠誠を失った中也を、かつて『私の犬』として組織に引き入れること

がそれを聞いて勝手に行動するのに任せれば、

戦えば

トマフィアを敵と認識してしまっていること、それを知った敵対組織から狙われているこ

中也の記憶が欠落していること、

『汚濁』を発動させてしまうかもしれないこと……中也の状況をただ伝え、私

武装探偵社に借りを作ることなく、

目的

森は、これをしてくれと明確には言わなかった。

きっとこれも、

あの人の手の平の上なのだろう。

ポートマフィアの周りを飛び回っていた小蝿はまとめて退治され、その最中に中也が異能 を暴走させたとしても、私の異能無効化によって、大事には至らない。 に失敗した私 が欲 しがらないはずがない。私に中也を迎えに行かせ、 行動を共にさせれば、

也の世話と護衛とポート マフィア周辺の『掃除』まで押し付けられたわけだ。

その戦闘のデータも陰で密かに取られている。

でほんの数日間に六個も武装派組織を壊滅させたのだ。 まともに もし諦めてくれていたとしても、太宰治と中原中也は :は今も、私がいつかポートマフィアに戻って来ると思っている節がある。 機能するのか、どの程度の戦果を期待できるのか、その情報を求めていた。二人 さぞ満足だろう。 ――『双黒』は、今でも駒として

れたら、中也は大人しくその事実を受け入れるだろう。昔と同じようにころっとあ ここで森と会って、中也がポートマフィアの幹部であったことの確かな証拠を突きつけ まち交戦になってしまう。

ているだけだが、

「……裏に回ろうか。さすがに正面突破は厳しい」

表面上は一般のオフィスビルを装い、どこにでもいそうなガードマンを外に数名立たせ

ここで少しでも騒ぎを起こせば、中から実働部隊が大挙して現れ、

ない靴を持ってくるようなボンクラを迎えに行かせたせいだ。ひょっとしたらそれすらも、 に傾倒するのだろう。 が用意した導入装置であったのかもしれ マフィアの中原中也を思い出したとき、 一時的にマフィアの狗であることを忘れてくれたのは、 ない 自分の本当の仲間を何人も倒してきた後 趣 味に合わ

だったとしたら、 「太宰、手前の言うことは本当に嘘ばかりだなァ」 なんで止めなかったと私が逆恨みされる気がする。

「ボディーガードを欲しがるような奴が、九人ぽっちの組織で戦ったりするかよ。 何が? 正面突破が無理なのは見れば明らかでしょ」 なぁ、

本当は、なんで組織に入ったんだ?」

「見つかったのか?」

「探し物が、……見つかるかもしれないと思ったから」

会話が噛み合っていないのも気にせずに中也は続ける。

「どうかな。――何もなかったわけじゃない」 そりゃよかった、と言って、中也はまた私の頭をぽんぽんと叩いた。これやめろって言

うの忘れてた。今言おうか、でもこれ以上ここに居たら怪しまれてしまうかもしれない。 「中也、もう行こう。裏に回るんだ」 「いいやだめだ。もう時間を過ぎている。俺としたことが、寝坊で遅刻だ」 中也は私の言うことを聞かずにビルの正面口への階段をすたすたと歩き出した。 ガード

マンがちらりと視線を向けてくる。 「ちょ、ちょっと待ちなよ。時間って?」 出社時間だよ」

会社員なんでな、と言って、早足にさっさと登り切ってしまった。

を掛けたモノクル の男、 マフィアの古株、 広津柳浪だ。

後を追おうとした私の視界に、よく知った顔が入り込んだ。

黒いコートに長

いストー

j.

「出迎えご苦労。遅れて悪かった」 「何も問題はありません。久しぶりの長期休暇は楽しまれまし

たか

な

ンドのコートをはためかせて、 也は、見舞いに行った日一緒に買ったおろしたてのスニーカーとジーンズの上にハイブラ 晴れ着の女の子みたいにまぶしく笑った。

広津が中也の肩にうやうやしくコートを掛ける。くるりと振り返って私を見下ろした中

ああ。結局仕事しちまったけどな」

「……ああそう。最初から、君もグルだったわけだ」

「森さんに言っといてよ。自分の庭の掃除くらい、次から自分たちだけでやってって」 グルも 何も、 と鼻で笑う。 確かに、元から中也は森と同じマフィ ア Ó 男

「助かったよ。吸血種の一件でうちも人手不足でな。おかげで被害は最小限で済んだし、

俺の相手は自分にしか務まらねぇといまだに思い込んでいるところも」 投降した奴等から使える奴をスカウトして人員の補充もできる」 「最低だな。 「データを取るようにも言われていたんだろ。どうだった? 何が超能力だアホ。相変わらず平然と嘘つくところ、そんな態度してお 君の かつての相 は

取り出し、それを私の方へ投げてよこした。 顔の正面に飛んできたそれを手で受け止め、握りこんだ拳を開くと、ぐにゃりと不格好 でも、と言葉を続けて、中也はジーンズのポケットから何かきらりと光る小さなものを

に曲がった銀のスプーンが一匙、私の手の平に収まっていた。 「手前が俺を最強のカードと言った。それに免じて、満点だったと報告するよ」 「それはどうも。……ねぇ、中也」

のと同じ柔らかい微笑みを浮かべて、唇だけで罵り、後は振り向かなかった。 それならば、と問 次はいつ会える?(と尋ねると、予想通り、もう会わねぇよ死ね、と答える。 いかけを変え、「楽しかった?」と尋ねたら、ふっとベッドで見せた

たけれど、元の形には戻らなかった。 手の中に残った金属をちょいちょいといじると、それはまたたやすく変な方向に曲がっ

私はそれをその場にぽいと放り捨てて、タクシーを拾いに歩き出した。



私フォ4開催 おめでとうございます!

昔から好きなバンドの『サイキックNo.9』という曲で「我ら超能力集団だ~♪」 というおばかなフレーズがあるんですけど、そういう太中を書きたくなってプロットも立てずに書き始めて数分後、「いや超能力集団って何!?」ってなって苦しみましたね~~本棚から『僕の地球を守って』を引っ張り出してきて読み返したりしたものの何一つ活かされませんでした!私はたぶん太宰ムゥ子を書きたかっただけなのだと思います。チャンネル登録よろしくお願いします☆

春になったらまた本を出そうかな~と思っております。

コンゴトモヨロシク…… (真・女神転生の新作で忙しいので11月は不在です)

サイキックNo,9

2021/9/19 発行(※ PDF 無料ダウンロード作品)

繪子(うしろがみ)

Pixiv ID: 2660047

※この本は個人的に作られた非公式ファンノベルです。原作者様・出版社様とは 一切関係ありません。無断転載・複製・複写・インターネット上への掲載を禁じ ます。このPDFファイルを意図せず入手された方はデータ削除をお願いします。

